

日本 Bangladesh 協会の皆様へ

■目次

*目次の見出しをクリックして頂ければ、直ちに本文に移ります。

■1) 巻頭言:『ボルシャカール(雨季)の雨の教えを想う』

京都大学東南アジア研究所連携教授
会員 安藤和雄

■2) 追悼寄稿:『優しく闘い続けた 河野一平君のこと(前編)』

—デザイナー 故河野一平 追悼(その3)—

グラフィックデザイナー designFF
シャプラニール=市民による海外協力の会前代表
福澤郁文

■3) 会員寄稿:『Bangladesh の人的資本発達史(その4)』

広島大学教授
教育開発国際協力研究センター
会員 日下部達哉

■4) 理事寄稿:『「ラナプラザの悲劇」に想いを馳せる』

YKK(株)総務部総務グループ長
理事 室田 幸宏

■5) 講演会・イベント

■6) 事務連絡

■7) 『読者のひろば』

- ・メルマガ6月号の各寄稿への読者の感想をご紹介します。
- ・メルマガ寄稿への感想ほか、お気づきの点など、なんでもお寄せ下さい。

■8) 編集後記

■1) 巻頭言:『ボルシャカール(雨季)の雨の教えを想う』

京都大学東南アジア研究所連携教授

会員 安藤和雄

ボルシャカール(雨季)が来た

しとしと降り続く雨音。私が住んだバンングラデシュの氾濫原に立地する村ではトタン屋根の家が多い。トタンをたたく雨音は騒音をかき消してくれる。雨が降れば、村人は、ゴムサンダルを脱いで、素足で、親指を使い雨で滑りやすくなった未舗装の道路の土を掴むように歩く。私が通いなれたバンングラデシュの氾濫原に立地する村の 1980 年代の風景である。日本の梅雨の季節は、バンングラデシュ暦のアシャル月(6 月中旬から 7 月中旬)に相当する。7 月中旬から 8 月中旬にかけてのスラボン月の 2 ケ月はボルシャカール(Rainy Season、雨季)である。氾濫原に立地するタンガイル県のドッキンチャムリア村では、雨が降り、川に新しい水(ジョール)が来て、水路(カール)を伝わって村の耕地に溢れ始めた時に、ボルシャ・アシュチェ(ボルシャが来た)という。

ボルシャカールの雨は、数日間降り続くことも珍しくなく、洗濯物は部屋干し、家じゅうがカビ臭くなる。そして、カタと呼ばれる布を何枚も重ね縫いした村で使われていた「布団」はしっとり湿つぽく重い。氾濫原は一面が大きな川となる。村の屋敷地は 1980 年代当時川に浮かぶ島の如しであった。「流れる川」となるためか、蚊もそれほどは気にならなくなる。

雨季には、私は、部屋の中ではルンギー(腰巻)1 枚で過ごすことが多かった。それは、長期派遣専門家時代のダツカの家でも、村のホームステイ先でも同じであった。下着もつけない。この湿つぽさが心地よい。しとしと雨の日は気温もそれほど上がらず、最高気温も 30℃にとどかないことも珍しくな



写真1アウスの収穫、ドッキンチャムリア村 1987 年 7 月 31 日

かった。日本に帰国してからも梅雨どきから夏にはルンギー一枚の癖が抜けない。この原稿もルンギー一枚で、パソコンに向かって書いている。天井にとりつけられた大型の3枚羽の扇風機が恋しくなる。しとしと雨の日は、村人たちも必要な農作業や買い物以外はなるべく外出を控える。自然、世の中が静かになる。まさに、バンングラデシュの村全体が、雨安居(註)のような生活に入るのだった。だから私はしとしと雨の日を決して嫌いではない。

(註) 仏教の出家修行者たちが雨期に 1 か所に滞在し、外出を禁じて集団の修行生活を送ること。サンスクリット語バルシャーバーサ vār āvāsa の訳。雨(う)安居、夏(げ)安居ともいう。

しかし、僧ではないバンングラデシュの農民にとっては、しとしと雨でも必要な農作業はしなければならない。それは日本の農民にとっても同じである。氾濫原に立地するバンングラデシュの村では、乾季の高収量ボロ稲作の導入前には、ジュートが、稲作では、アウス稲と深水アマン稲が雨季の始まる 3 月下旬から4月にかけて畑状態の田にそれぞれ単播、混播されていた。ボルシャカールに入ると田の湛水は日に日に増水し、稲もジュートも一日一日と草丈を伸ばしてくる。村の屋敷地の周辺一面が緑のジュータンを敷きつめたようになる。そして、深水アマン稲は洪水がひいた 11 月から 12 月に収穫される。ルンギーは作業ズボンにも変身する。カチャ・デワといって、ルンギーを又の間からとおして巻き上げ、背中の腰のところでくいこませしっかりと固定する。作業用の「短い半ズボン」にして、7 月末には、アウスの刈り取りを腰まで、時には、胸まで水にはいって行う(写真1)。8 月にはジュートの皮をむいて繊維をとる作業が最盛期をむかえる。水につかる作業は男性の仕事(写真2)である。女性はこの作業を「陸(おか)」で行い、水で洗う。

雨の日の田打ち車による除草作業

日本では、除草剤を使っていない私のような農家は、雨降りの日と重なる田植え後の1ヶ月半となる6月から7月上旬は、時間さえあれば、田打ち車(回転式中耕除草機)を、水田で押す。土砂降りでないかぎり決行する。妻や母は、こんな雨の中をやらなくてもいいじゃないか、と言うが、コナギ、ヒエなどの水田雑草は、雨だからといって成長を止めてはしてくれない。雨合羽をきてても体が雨で冷えることを心配してくれているのである。しかし、晴れた日より暑くないので私はそれほどこの時期の雨の中での作業は苦にならない。目標は、一週間に一度、5回以上田打ち車をかけて、条間の除草を行う。株間は取らない。株間のコナギはヒエ、タウコギの発生を抑制し、イネの草丈を超えることはないコナギはイネとの共生が実現していると言えるだろう。ただし、雨に濡れて作業をしていいのは、8月一杯までだと私は決めている。このことを、バングラデシュの氾濫原に立地するアウス稲と深水アマン稲の混播栽培がおこなわれていたノアカリ県のシラディー村の農民から学んだ。[編集部:詳しくはメルマガ76号(2020年12月号)ご参照]



寒さが生まれる

1984年10月に妻と2歳になった長女をつれてバングラデシュ農業大学大学院栽培学科博士課程に留学した。研究テーマは、アウス稲と深水アマン稲との混播栽培に関する研究であった。このベンガルデルタ独特の洪水環境に適応した栽培方法は、2023年の現在では、多くの地域から姿を消している。乾季に高収量品種ボロ稲が栽培され、雨季の稲作をやめたところも珍しくない。タンガイル県のドッキンチャムリア村のように、高収量品種ボロ稲が収穫された直後の5月末頃に、深水アマン稲の苗が移植されている。混播されるアウス稲は栽培されなくなったのだ。

1985年の雨季、私は、シラディー村でアウス稲の収穫時期にアウス稲と深水アマン稲の栽植密度(1平方メートルあたりのそれぞれの株数)を水に潜って調べ、アウス稲と深水アマン稲のサンプル株をとって、

写真2 ジュートの繊維とり
ドッキンチャムリア村 1987年8月16日

草丈、稈長、穂長、等々を測定していた。ずぶ濡れになっての調査である。それを見ていた農民が次の諺(プロバード)を教えてくれた。

バッドレール バロ シーテル ジョルモ

バッド口月の12日(8月30日頃です)、寒さが生まれる

バングラデシュの村々では、農業技術や農業気象に関する「コナール・ボチョン(コナの格言)」が知られているが、この諺は、コナの格言ではない。ドッキンチャムリア村でも、諺としては伝わっていないが、このような教えがあるという。シラディー村やドッキンチャムリア村の農民たちは、9月以降に雨に濡れることを戒めているのである。それまでとはうってかわって体が冷えて風邪をひくという。バングラデシュの農民たちは、気温の日変化や季節的な変化に敏感で、それに合わせて生活をおくっている。近年では地球温暖化のこともあり9月に入っても残暑が厳しいが、それでも、9月に入れば、季節は確実に秋から冬に向かっていることを朝夕の気温の低下で感じることができる。そして、冬の寒さの底に向かう。

マゲール シーツテ バーグ ドオライ

マグ月の寒さはトラをも震え上がらせる(寒さから逃げさせる)

この諺は、ドッキンチャムリア村で村人から教わった。マグ月(1月中旬から2月中旬)の最低温度は、ドッキンチャムリア

村では時に10度近くとなる。その寒さが8月末には始まっている。なんとも詩的な情感の豊かさだろうか。

自然に合わせた生活リズム

バングラデシュの村人は頭を冷やすと病気(風邪)になると信じているので、上半身は裸ということも珍しくないが、頭を濡らさないように、雨降りには、菅笠(マタイル)や、ビニール袋を頭にすっぽりとかぶって雨の中で作業をする(写真1)。この菅笠は、雨の降らない暑い季節には日よけとして使われる。

日常生活では、村では池で沐浴をしたり、手押しポンプでバケツに水ためてそれを手酌ですくってかぶって行水をしたりしていた。午後は沐浴や行水をするなどよく村人から注意された。午後は気温が下がっていくので、体があたたまらないからだろう。理にかなった沐浴の方法だ。冬の池での沐浴や外でのポンプの行水をする時には、とくにこの教えを実感する。そして、日本でも私はシャワーや入浴は朝派である。

食事の前の手洗いと、食事後の手洗いと口ゆすぎ、朝起きたらすぐに、10分くらいかけて歯を磨く。これらの日常的習慣はバングラデシュのモスリムの村人から学んだことである。ドッキンチャムリアのモスリムの村人は、朝一番の礼拝のためにも、朝起きたらすぐうがいをして顔を洗う。礼拝の後は、成人男性は、ニームの木の枝の先を歯で噛み砕いてブラシ状にした「歯ブラシ」で、談笑しながら、30分、時には、一時間も歯磨きをしていた。女性は、土でできた竈の内側にできた焼き土(ポラマティ)を人差し指もしくは中指につけて指で磨いていた。女性の朝は庭掃き、朝食づくり、子供の世話等々で忙しいこともあり、朝の歯磨きは3~10分で終わる。

人間の捉え方以外にも健康維持の方法についてもバングラデシュの村人から私は多くを学ぶことができた。いつも驚かされるのは、その根底にあるのが、ベンガルデルタの自然環境に逆らわずに生きる村人たちの姿勢であった。雨の中、田打ち車を押しながらそんなことが頭をよぎったのである。それを今回は書き留めた。

■2) 追悼寄稿:『優しく闘い続けた 河野一平君のこと(前編)』

—デザイナー 故河野一平 追悼(その3)—

グラフィックデザイナー designFF

シャプラニール=市民による海外協力の会前代表

福澤郁文

河野くんのつぶやき

『河野くん、うちのデザイン事務所で働くまえに気分転換にもなるから、いちどバングラデシュを旅してこない...?』

彼が小さな印刷会社『ベクトル』の代表として、何人かの従業員を抱えて奔走していた時代、私のデザイン事務所にもよく出入りしていた。彼の印刷会社は、ハンディをもつ人たちに働ける場をつくり、組織運営も社員の総意で進めていくような理想を掲げていた。

しかし、年月が経つにつれて、内部でも若干の軋みが生じてきていた。運営をめぐる河野代表に対して、スタッフからの責任追及も少なからずあったと小耳に挟んでいた。

印刷物の発注を通して営業活動をしていた河野は、ある日のこと『ウチの会社がうまくいかないの、責任とってやめることを考えているんだ...』との言葉を口にした、僕はいたく同情してしまった。

詳しい内部の事情は解らなかったが、ハンディをもつ人も働くことができる、理想とする、福祉の現場をつくろうと意気に燃えていた...が、今は数年前とは変わり、印刷の工場規模も拡大し、事情が変化してきていることが、彼の言葉からも理解できた。

我々のデザイン会社も数人の弱小組織である。締め切り仕事に追われ、毎晩のように深夜まで働かなければならない現場でもあった。

当時は、シャプラニールの代表としても会議も頻繁にあり、活動運営などふくめ多岐に渡っていた。あの時代には、日本社会の NGO に対する関心の高まりとともに、NGO の活動は、プロジェクト資金の確保はじめ、さまざまな問題を抱えていた。

私も心身ともに過度な日々をおくる身でもあったのだ。このままでは身が持たないと考えていた。

河野くんのつぶやきに、僕は『会社のスタッフとして営業を任せ、いずれは責任もって会社を担ってもらえるかもしれない...』と、考えた。

『一平君、もし印刷会社やめるんだったら、ウチで働いてみないか』と誘った。彼は迷うかと思いきや、すんなりと『いいよ...』というような表情を見せた。

バングラデシュに出会う旅から NGO 活動へと

NGO シャプラニールの活動は、社会的意味においても重要な時期を迎えており、バングラデシュでのプロジェクトもさらに展開したい、と考えていた。

彼が参加すれば『私も時間的にも一層活動に関われるようになれるかも...』と、期待とともに考えたのだ。

『ウチで働く前に、できればバングラデシュの様子も知っておいたほうがいい』と。我々はデザイン制作会社ではない。NGO 協力支援の仕事が多く、いまアジアの現場をみておいたほうがいい...』

それから、話はトントン拍子のようにすすんでいく。河野一平は印刷会社代表を降りた。その年にはバングラデシュに飛び立っていった。スケッチブックに色鉛筆入れを腰に差し、村など各地を旅して廻る。友人の家に泊まり、シャプラニールの現地フィールドにも行った。当時、我々の活動地の村は三地域ほどあった。『シヨミティ』という組合を軸に、収入向上から総



在バングラデシュの
音。鳥の鳴き声、水が流れている
音、風の音、人の笑い声、
水が流れている音、
鳥の鳴き声。山、川、村、
水が流れている音、
鳥の鳴き声、水が流れている
音、水が流れている音、
鳥の鳴き声、水が流れている
音、水が流れている音。

1991.3.7. 木 朝

Mouru no

合的な村づくりをイメージしていた。

市民による海外協力の会＝シャプラニールの活動は、1980 年代後半から 90 年代半ばにかけて、まるでジェットコースターに乗ったかのように、組織も活動も激しく揺れ動いていく。スタッフの陣容も一変した。数年後には Bangladesh において、村のショミティを取り巻く状況に、大きな変革の嵐が襲う。

1991 年、Bangladesh を襲うサイクロン被害をめぐる「組織として救援活動に乗り出すか否か...」組織内でも活動の方向性をめぐり、連日にわたり激論が交わされていく。かつて『開発とはなにか、との理想を求める組織』であり、緊急の災害援助はしないと決めていたのだった。

当時は、各種の学習会やイベントの開催、手工芸品の通信販売や各地のバザールへの出張販売なども拡大しつつあった。『ベンガルカレー・パーティ』も始まる。会員間の交流事業の恒例の『夏のつどい』準備や合宿の大イベントなども重なった。その背景のひとつには日本の NPO/NGO などの市民活動が、時代の脚光を浴びつつあったこと。社会的にも注目と期待を集めるような時代の変化がやってくるのである。その頃、日本経済もバブル時代の絶頂期ともいわれ、日本社会全体が浮き足立っていた時代だ。

しかし、我々の市民活動は資金の枯渇やスタッフの大規模な入れ替わりなどで、組織の再編成が続いていた。

河野は『夏のつどい』の実行委員長を引受けるとともに、各活動に参加してその活躍ぶりを見せていくことになる。



学生運動、ムサビ民主化闘争で知り合う

河野一平と私は、武蔵野美術大学で同期である。私は商業デザイン科で、彼は工芸工業デザイン科に所属していた。デッサンや実技科目では教室も制作実習も、異なるカリキュラムが組まれていた。一般教養課程での『哲学』『音楽概論』とか『商品学』『バウハウス理論』(註)を学ぶ講義などでは、芸能デザイン科を含め、大教室で学ぶことがあった。大学での基礎教育過程の一年間は、無事に過ぎていったように思う。

(註)『バウハウス理論』

バウハウスは、1919～33 年にドイツのワイマールに開設された美術・工芸学校。バウハウスでは、芸術と技術の新しい統合をめざすことを理念として掲げ、現代デザインの合理性と機能性を追求した。

しかし、授業が二年次に入ると、にわかには学園内が騒々しくなっていた。私は秋の芸術祭実行委員に推され、学生自治会などに顔を出すようになる。同じように河野も全学集会に工業デザイン科の代表として顔を見せるようになってきていた。1970 年の日米安保条約の期限を前に、全国的に学生運動のうねりが高まりつつある時代だった。東大全共闘による大学封鎖や『日大闘争』が社会をにぎわし、各メディアに連日のように報道されることが続く。ベトナム戦争反対の市民活動『ベ平連』などの、市民による反戦活動は盛り上がりを見せ、我々も参加していく。社会的に騒然とした時代が続いていった。

武蔵野美術大学は小平市の畑のなかに位置していて、ときに土ぼこり舞い上がるようなところだった。我が”ムサビ”においても学園内が騒然としてきっかけとなる、ある出来事があった。

『商品学』の講義内容が問題視される。教授の教える商品学は資本主義社会の欺瞞性をあらためて示すかのようであった。「消費者を如何にデ



ザインの力で幻想を与えられるか」、「商品価値をつり上げ、メディアの力と広告デザイン戦略とで売り込んでいけるか...」と、いえるかのような内容であった。その講義に対し、学生側から抗議の声をあげた。

美術大学の講義で学ぶべきことは、『現在の資本主義社会に与し、企業に従順な人間を創り出すことではなく、環境との調和の中で理想的なデザイン行為をもとめ、未来社会の創造行為として学ぶべきである...』という、バウハウスの理念とともに、学生らしいまっとうな思考を抱いていたのだ。

学生運動にあった、もうひとつの視点

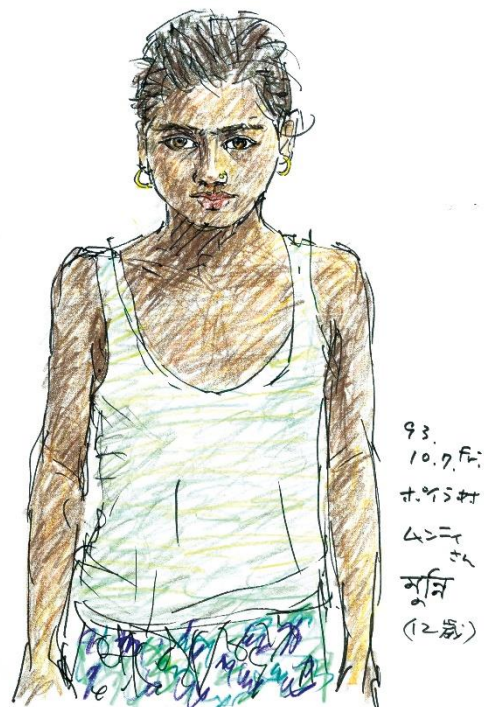
こうした学生運動の活動現場で、学科を超えて、河野との出会いがあった。他にも、ムサビの大イベントでもある『秋の芸術祭』の自主企画運営をめぐり、大学側と私たち学生との意見の食い違いが生じていく。一般企業への就職活動の一環として、授業の実践内容をプレゼンテーションさせたい大学側と、「芸術祭こそは学生の表現の場」であることを主張する学生側とが対立した。

全学集会から授業ボイコット、そして学生による大学封鎖へと、ことが事件性を帯びていってしまう。あの時代は、全国的に『学園紛争時代』といわれ、どこの大学も大きく揺らいでいた。われわれ学生にとっては『学園紛争』ではなく、まっとうな大学の民主化への『闘争』でもあったのだ。『授業の主体を我々の手に取り戻せ...』という主張があった。「これからの未来に理想の社会をどのようにして形成できるか?」を、学生たちは議論をかさね、問うていたのだ。

あの時代に河野が大きな立て看板に向かい、ポスターカラーで檄文を描き込む姿をみている。彼は立て看板を描くのがうまかった。学園闘争ばかりの二年、三年次を終えて、四年次になるところには、ともに闘争を組んでいた我々には『留年』の張り紙が、大学側から掲示される始末だった。

僕はといえば、留年を受入れることができなかった。大学闘争のなかで、学生たちの主張に理解を示し親交のあった教授たちを訪ねた。背景にあった事情を説明してまわった。新年度の教授会で僕の留年は取り消された。

河野は留年が決まり、大学を中退していく。どこかに隠れてしまった。あの頃、彼はなにをしていたのだろうか。



[メルマガ 118号(8月号)へ続く]

■3) 会員寄稿:『バングラデシュの人的資本発達史(その4)』

広島大学教授
教育開発国際協力研究センター
会員 日下部達哉

*日下部達哉教授の横顔

専門は比較教育学。1999 年よりバングラデシュ4農村の 10 年おきの世帯データを用いてバングラデシュの教育発展の変化を研究している。その他、アジア・アフリカ諸国の近年における教育発展も継続的に研究しており、それらは国際教育協力政策に活用されている。

[メルマガ 110 号(4 月号)よりの続き]

さて、いよいよ連載も最終回を迎えました。ひとまず過去三回の連載を振り返っておきたいと思います。この連載では、バングラデシュには豊富な人的資本があるとされており、その質を過去の研究成果から分析、紹介するというをやってきました。90 年代から教育制度が普及、結果的にバングラデシュには、管理部門を任せられるような、高学歴の人もいれば、小学校中退のメモすらとれない人もいるという、多様といえば多様な人的資本がありました。そのため、「質の評価は、雇用する側とされる側のマッチングによる」としました。

人的資本の多様化とその活用

今回、もう少し掘り下げて議論したいと思います。私が調べたチッタゴンの輸出加工区(EPZ)の事例では、雇う側が効率化や、ラインを組みなおすなどの工夫をして、低学歴から高学歴までの多くの人的資本を雇用、生産に役立てていました。具体的にいえば、ISO(国際標準化機構)の認証取得などを丸投げできるようなヒンドゥーの家族を丸ごと雇っていて、かなりの高給で厚遇する、またライン工を管理するような管理部門の人材も、最低でカレッジ、また大卒の人材を雇用、やはり厚遇されていました。一方、ライン工は、きわめて単純な作業に従事させ、給料を抑え、毎日のように数人が辞め、数人が入ってくるという状況でした。

これは人的資本の二極化が進んだということを意味し、人的資本の質が、一様に高いわけではないですが、管理部門から生産部門までを担える人材が揃っていることを意味します。ある日本資本の工場では、派遣された日本人 1-2 名のきわめて少数で管理、その下はすべてバングラデシュ人スタッフで操業していた事例もありました。そこはレンズの研磨などをしてきた工場でしたが、日本車にも搭載されるような、かなり精密な部品の納品を実現していました。もう 10 年以上前の調査結果でしたが、その時点で、不本意就業や、失業の状況を解消、ある程度需給関係の調整ができれば、適切な場所で、適切な人的資本を使える状況にありました。EPZ は特殊な環境ではありますが、旺盛なバングラデシュの経済発展に呼応するように、雇用側が、実情に応じラインを組みなおすなどして、人的資本を活用している状況がありました。近郊農村の調査では、EPZ への人材供給が盛んにおこなわれ、2022 年の調査では、村人たちの学歴はより高くなっていました。(連載2 参照)。

以上が私の理解する、バングラデシュにある「豊富な人材」のあり方です。人々における学歴の向上とともに、管理部門を任せられるような高度人材も育ってきていますが、初等中等教育レベルで就学をやめる、あるいはドロップアウトし、生産関連人材として活用される人材もあり、日本のように、生産関連人材が不足するということにはなっていないと思われず。そうした上から下まで揃った部分が、「豊富」な人的資本といわれるゆえんではないでしょうか。

背景にある教育制度の普及

このように、バングラデシュの豊富な人的資本を生み出した教育制度も、実にユニークで、多様なアクターの存在があります。2000 年代初頭には、公立、私立に加え、NGO や普通教育を施すマドラサ(イスラーム学院)など 12 種類の初等教育を担うアクターがいました。90 年代以前、だいたい村に一つ、政府立学校がありましたが、増加していく子どもの数を吸収しきれず、かといって政府が学校を建設することはせず、NGO やマドラサによる公教育参入を認め、プライベートセクターに教育を発展させることを任せたのです。そのため、「教育の時代」といわれた 90 年代から 2000 年代、政府立学校はほとんど増えていないのです。

皆さんが認識している通り、バングラデシュは、2015 年に世界銀行の定義による低中所得国の仲間入りを果たしたように、南アジアの中でも経済発展著しい存在です。私はパキスタンやネパールにも調査にいきましたが、数字だけではなく、肌で感じる勢いがあります。教育においてバングラデシュが採用した、政府ができない部分は、プライベートセクターに任せるやり方は、発展の一つの鍵ではないでしょうか。これまで、述べてきたように、人的資本発達に、教育の発展が貢献してきたことは間違いありません。

作家の司馬遼太郎は、人間だけではなく、国家にも心理や性格があるといえる、としましたが、こうした人的資本育成の背景には、ひとまず種々雑多なものを認め、活用、発展していくバングラデシュの性格(後で規制を強めもするのですが)が、豊かな人的資本育成の土壌にあるような気がします。学問的にとらえなおすと、一つの国を低中所得国まで押し上げた、人的資本育成のバングラデシュ・モデルは、これから発展していく他の国の参考にもなるものだろうと考えています。

そう思って調べないとな、と思っていたら、嬉しいことに挑戦的研究(開拓)という科研費に採択され(6月30日)、プライベートセクターがいかに関心を教育に誘引しているか、を調べて良いことになりました。本稿の続きは、また研究が進みましたら書かせていただきたいと思います。

これまで、4 回にわたる拙稿連載をお読みいただきましてありがとうございました。

(完)

■4) 理事寄稿:『「ラナプラザの悲劇」に想いを馳せる』

YKK(株)総務部総務グループ長
理事 室田 幸宏

日本バングラデシュ協会の企業委員会理事を引き継いでから早一年、私もメールマガジンへ理事寄稿を執筆することとなりました。とはいえ、理事として1年経過したものの、私自身はこれまでバングラデシュへの赴任はおろか、出張や旅行で足を踏み入れた経験もなく、現地のことはほとんど理解できていない状況です。いったい何を書けばよいものなのか? 解らないなりにバングラデシュについて思うところを記していきます。乱文ご容赦いただければ幸いです。

赴任先上海で見た経済発展と地域格差

私自身は過去に5年ほど中国、上海に赴任しておりました。このときは現在の総務部とは異なり、情報システム部に所属しておりましたので、中国国内の弊社システムの開発・運用が主な私の役目でありました。赴任した2011年当時において、すでに目覚ましい経済発展を遂げていた上海は、東京以上に高層ビルが立ち並び、超近代的な大都市でした。とはいえ郊外に向けて車で2時間足らずも走れば、老朽化したコンクリート造りの建物が軒を連ねているような地域も見受けられました。崩れかけた建物で生活する中国人を目にして、社会主義国家における大きな格差に少なからずショックも受けました。おそらく、バングラデシュも、近年経済発展が著しいとはいえ、都市開発が進むダッカ中心部などの地域と、そこから取り残された地域との格差はやはり大きいのではないかと想像しています。

『ラナプラザの悲劇』

アパレルに関連する企業に身を置く者として、バングラデシュと聞いて思い出すのは、やはり2013年にあった『ラナプラザの悲劇』です。当時私はこのニュースを中国で知ったのですが、テレビやネットニュースの映像で流れていた崩落した工場ビルを目にしたとき、私は上海郊外にあったみずばらしい建物を想起しました。事故の原因としては、違法に建物を増築、改修していたために構造上の問題が生じ、建物が倒壊したとのことのようなようです。映像にあったその倒壊したビルはいかにも古びた造りで、内部の労働環境も劣悪であったらうということは素人目にも容易に想像できるものでした。この事故で犠牲となった1,134人の労働者、その多くは女性だったということですが、各々が自身の家族を養うため、あるいは家計を助けるため、選択肢がない中でやむを得ず劣悪な労働環境に長時間身を置いていたのだらうと思います。

ファストファッション業界の労働慣行

ビル崩落の危険性を認識しつつも、労働者たちに避難もさせず、また避難の必要性を訴える彼らの声にも耳を貸さずに、ひたすら納期を守るために働き続けさせた工場責任者やビル所有者たちの罪は極めて重いものです。ただ、この悲劇の根本的な問題として、工場責任者たちにそうした過酷な納期を強いたファストファッション業界(註1)の労働慣行があります。低価格かつ短命なファッションによる大量生産・大量消費、ラナプラザの事故は儲け主義に走りすぎたファストファッション業界が招いた悲劇だったということなのだと思います。私自身の立場を鑑みても、あの工場の中で生産されていたアパレル製品のブランドには弊社の取引先も含まれており、ファストファッション業界とも取引のある会社に身を置く者として、この問題とまったくの無関係というわけではありません。

(註1)ファストファッション

最先端の流行をうまく採り入れながらも低価格な衣料品を販売するブランド業態のこと。また、短いサイクルで世界的に大量生産することも特徴のひとつ。

エシカル消費

この事故を契機に、ファストファッション業界もその方向性を大きく見直すことになりました。フェアトレードが声高に叫ばれるようになり、各企業は自社の製造プロセスは当然のこと、下請けや取引先においても労働者が不当に扱われることがないよう、相互に厳しく監査するようになりました。また若い世代を中心に、エシカル消費(註2)ということが意識されるようになりました。これまでの資本主義経済の礎となっていた大量生産・大量消費社会は、そこから生じる大量廃棄による環境破壊問題への対策からも、今後大きく様変わりしていくことになると思います。

(註2)エシカル消費

消費者各自が、「環境を破壊しない」「労働者から搾取しない」といった、人や社会・環境に配慮した、倫理的(エシカル)な消費行動を行うこと。

日本と異なり、その人口構成比において若年層側が多くの割合を占める Bangladesh は、今後より一層大きな経済発展が見込まれるでしょう。ただ経済発展していく過程で、言わずもがなですが、その中に身を置く労働者たちが不当に搾取され、あまつさえ命を失うようなことは決してあってはならないことと考えます。Bangladesh がこれから発展していく中で、『ラナプラザの悲劇』のような事故が二度と起きないことを、アパレル産業に関わる一個人として望むばかりです。

■5) 講演会・イベント

□第43回講演会のご案内(2023年8月12日(土)14時00分～)

講師 松本 智子 特定非営利活動法人 日本・Bangladesh 文化交流会理事長
演題 Bangladesh の未来を拓く学校給食に取り組んで
主催 一般社団法人 日本 Bangladesh 協会
共催 特定非営利活動法人 日本・Bangladesh 文化交流会

第43回講演会は、「Bangladesh の未来を拓く学校給食に取り組んで」と題して日本・Bangladesh 文化交流会理事長の松本智子さんにお話を伺います。

日本では小学校給食は当たり前に行われていますが、Bangladesh でも学校給食の動きが始まっているのをご存じでしょうか。

ジョソール県シャシャ郡の農村で活動を行っている当会は、子どもたちの栄養改善のために2010年から学校給食に取り組んでいます。地域住民参画による持続可能な学校給食をめざしたモデルづくりは、コロナで中断しましたが、ようやく再開することができました。当会の学校給食の取り組みと、給食実施で見える子どもたちの様子、人々の暮らし、そして健康を願う母親たちの姿を紹介します。

また、莫大な経費がかかるため、一旦取りやめになった Bangladesh 政府の学校給食計画が新しい形で動き出しています。その現状をお伝えします。

1. 日時 8 月 12 日 (土) 14 時 00 分～会場での対面及びオンライン参加
2. 場所 早稲田奉仕園 リバティールホール
新宿区西早稲田 2-3-1 (地下鉄早稲田駅下車 2 番出口徒歩 7 分)
アクセス : <https://www.hoshien.or.jp/map/>
3. 申し込み グーグルフォームに会場参加 (先着 40 名) ・又はオンライン参加の
区別を明記し、必要事項を記載の上お申し込みください。
●グーグルフォーム <https://00m.in/QaycK>

*参加希望の方は 8 月 4 日迄にお申し込みください
(オンライン申し込みの方は後日 URL とパスワードをお知らせいたします)
[問い合わせ先] 講演会担当 osahaya@arrow.ocn.ne.jp

4. 講師のプロフィール

特定非営利活動法人日本・Bangladesh 文化交流会理事長

1981 年、青年海外協力隊で Bangladesh に派遣。ジョソール県シャシャ郡で女性開発プログラムの活動に携わる。帰国後、青年海外協力隊訓練所のベンガル語講師、協力隊を育てる会職員。2013 年から日本・Bangladesh 文化交流会代表、2015 年特定非営利活動法人理事長。東京第三友の会会員。

□「中小企業海外ビジネス人材育成塾(商談準備講座)」9 月期・食品分野(1)

(対象地域:シンガポール/韓国/Bangladesh)

<https://www.jetro.go.jp/events/igc/0070ee2cf3c5f971.html>

(JETRO 募集期間:2023 年 7 月 24 日(月曜)11 時 00 分～8 月 4 日(金曜)12 時 00 分まで)

あなたの海外ビジネススキルを基礎から鍛える 7 日間

募集期間:2023 年 7 月 24 日(月曜)11 時 00 分～8 月 4 日(金曜)12 時 00 分まで

本講座は、これから初めて海外バイヤーとの輸出商談に臨む方が、輸出の基礎知識と商談スキルを、計 7 回・約 3 カ月で習得する研修です。e ラーニング、講義、ワークショップ、個別指導などにより、輸出実務の基礎、海外展開戦略の策定、実際の商談に使えるプレゼン資料の作成、商談ロールプレイ等を行っていきます。さらにはジェトロ海外ネットワークにより、現地在住の専門家による講義、個別指導を受けることができます。

オンライン形式が中心ですが、ペアワーク・グループワークを多く活用し、講師だけでなく他の参加者からも学ぶことが可能となっています。また対面の機会もあるため、同じ目的・志を持つ人たちとの社外ネットワーキングを希望される方にも最適なプログラムです。食品分野で海外展開をお考えの方は是非ご参加ください。

対象国・地域の市場紹介

Bangladesh

まだまだ現地で入手可能な日本食材は限定的。未開の市場。近年はローカル経営のフュージョン系を中心に日本食レストランが急増中。

イスラム教徒が人口の 9 割を占めるため、ハラール認証は重要。

高額な輸入税はネック。

詳しくはリンク先をご確認ください。

□【経済産業省主催】海外ジョブフェアを、Bangladesh で今年初開催!

Bangladesh 現地事務局 VENTURAS が出展企業受付中

20 社超の日本企業の参加が見込まれる、当地過去最大規模の日本就職フェア

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000077638.html>

案内 HP:<https://japanjobfair.go.jp/for-company/>

20 社超の日本企業の参加が見込まれる、当地過去最大規模の日本就職フェア

経済産業省では、日本企業の海外展開や新たな視点による商品・サービスの開発・提供、新たなビジネスモデルの創出等の観点から、高度な知識・技能を有する外国人材の日本企業での就業、活躍を推進しています。そのため、過去数年にわたり、日本企業が、優秀な海外の大学生等との出会う場を提供することを目的として、アジア各国で海外ジョブフェア事業を実施してきました。

今年度、アジア 6 ヶ国 9 都市で開催される海外ジョブフェア(Japan Job Fair in Asia)において、初めて Bangladesh で開催が決定し、株式会社 VENTURAS(本社:東京都渋谷区、代表取締役社長:上田代里子)が、海外ジョブフェアの現地事務所に選定されました。(委託先:株式会社パソナ 再委託先 Bangladesh 事務局 VENTURAS)

今回 20 社を超える日本企業のジョブフェア参加が見込まれており、Bangladesh においては、過去最大規模の日本就職フェアの開催となります。本イベントを通じて、Bangladesh 全土から集まるトップ大学卒業生をはじめ優秀な現地人材とのマッチング、および多様な職種での日本・現地採用の機会を提供します。

【ジョブフェア開催概要】

名称 | Japan Job Fair in Asia

日時 | 2023 年 9 月 15 日(金)オンライン開催

2023 年 10 月 13 日(金)オフライン(ダッカ市内)開催

出展希望企業様申込みフォーム | <https://japanjobfair.go.jp/registration/>

出展申込締切 | 2023 年 6 月 30 日(金)→ 7/31(月)まで延長決定

参加費 | 無料

■6)『事務連絡』

○日本 Bangladesh 協会のホームページでは、『会員向け』に、メールマガジン及び行事や講演の動画を供覧してきました。今般、ホームページの会員向けサイトに障害が発生したため、一時的に供覧を中止しました。復旧の目途は立っておりませんが、早期の復旧を目指し調整中ですので、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

○会員情報変更届のお願い: 事務局では会員各位の連絡先等の最新版を常備する必要がありますので、皆様の住所やメールアドレスが変更された場合、法人会員においてご担当者が変更になった場合は、jimukyoku@japan-bangladesh.org までお知らせ下さるようお願い致します。

■7)『読者のひろば』

1.五十嵐理奈巻頭言:『勢いづくバングラデシュ現代美術界(1)はじめに』

○これまでの巻頭言に引き続き、着実な経済成長を遂げつつあるバングラデシュにおける美術界の発展というか盛況ぶりについて連載いただけるということで楽しみにしております。数年前に現地に生活していた時の感覚ですが、富裕層を含めて現地のエリートと呼ばれる人々の間で、美術に対する関心が非常に高いと実感しました。美術の世界におけるビジネス関係者の関与と貢献に大きなものがあると思いました。

○前回までは創成期を扱っていたバングラデシュ美術界の記事ですが、新しく最近の美術界の勢いを連続で紹介するという試みということで、また新たな知見が得られることを楽しみにしています。「海外でのバングラデシュの認知度の低さに悔しい思いをしている」起業家たちが財団を立ち上げたということですが、その気持ちはよくわかります。バングラデシュ人でなくとも、ベンガル文化に関わるものとして同じ悔しさはしばしば感じていますので。

2.河野鉄平追悼寄稿:『バングラデシュ親子紀行(後編)』

○河野鉄平さんの寄稿を拝読し、自分が若い頃にバングラデシュを訪れたときに感じた、不快感、ふとした時に感じる心地良さや安心感が蘇りました。私も河野一平さんと親しくさせていただいた一人ですが、バングラデシュ旅行についてそれは「高校卒業のお祝い」であり、「あくまで晴れて合格した大学への入学祝いというのではないことを強調された」ところが、いかにも河野さんらしく、お人柄を懐かしく思い起こしました。河野さんの絵は風景だけではなく、人々の表情、市井の暮らし、今では見なくなった生活道具などがそのままに、丁寧に描かれています。1989~2001年くらいの市民の暮らしの記録としても価値が高く、これからも多くの人に見ていただきたい作品だと思います。

○学生の頃、タイとミャンマー国境近くのカレン族の村に泊めていただいたことがある。おいしい、おいしい、と食べていたら、連れて行ってくれた方が「全部食べないように。残った物をこの家の人たちが食べるから。」と言われてハッとしました。貧しい中においても、全ての物を客人に差し出して歓迎してくれる、あの姿を思い出した。物の豊かさや心の豊かさは反比例するのだろうか。

3.丹羽理事寄稿:『旅行誌 TRANSIT 59号 東インド・バングラデシュ 特集:編集の裏話を聞く』

○ご紹介の旅行誌は、バングラデシュの良さを日本国内に広げるにあたり、興味深い切り口を提示していると感じます。コルカタに滞在してベンガルの世界やベンガル語に関心を持ち、バングラデシュについて知りたいと思った人は潜在的には結構いるのではないかと思います。日本国内において、バングラデシュに比ベインドに対する認知度や関心は格段に高く、その傾向は続くと思います。インドの多様性に魅せられる中、西ベンガル州、コルカタに旅行し、そこからバングラデシュへ惹かれる人々が出てくることを期待し、日バ協会としてもそういう人々にも訴えるかけることが出来ればと考えます。

○この本をまだ読んでいませんが、本寄稿を拝見して早速図書館の在庫を確認して予約を入れました(5人待ち)。

私も昔バングラデシュに住んで1年余り後、ベナポールを経てインドのコルカタに行った際に風景や人々の顔つき・表情が似ていて、言葉も通じるコルカタ周辺での滞在にはある種の居心地の良さ覚えました。西ベンガルですぐに実感した相違点は通貨ルピーとタカくらいではなかったかと思えます。ブッダガヤ近辺でもベンガル語が通じた記憶があります。アッサムやメガラヤではどうなのかなど興味津々で、いつか訪問してみたいものです。

4.小野理事寄稿:『カラーチーに住む「ベンガリー」(後編)』

○21世紀でも、世界各地で紛争が起き、多くの難民が発生し、苦難の生活を強いられている現状をどうにかできないのかと思います。特に、次世代の人たちが国籍も取れず、教育なども受けられず、負のスパイラルに入ってしまうのは悲しいことです。G地区と称されるマーケットで、無料の食事が提供され、母親と女の子の組み合わせが目立つとのこと。女の子が

Gマーケットに来る理由も何となく理解できました。

バングラデシュに関しては、貧困層はそのまま取り残され、富裕層との格差が20年～30年前に較べて相当に拡大していると感じます。

○カラチに住むベンガル人というテーマは、ベンガル人やバングラデシュをグローバルに見る上でも非常に大事な視点であると思います。このようなマージナルなベンガル人を取材すること、そしてそれを人々に知らしめるということはとても大切なことではないでしょうか。またそれと同時に、普通に自国(と自認する場所)に暮らす典型的な市民という枠に収まらない人々が世界中に数多く存在することも思い出させられます。

■8)編集後記

2014年の日バ協会設立とともにメルマガがスタートしました。堀口初代会長は、読み応えのある”Quality Magazine”にすべく力を注がれ、文字通り、手塩にかけて育てられました。2019年の堀口会長退任後、ふつつかな私が、編集の任を引き継ぎました。2期4年の区切りを迎え、この7月号を以てメルマガ編集長を離任します。

この4年間、”Quality“を維持しつつ、”Diversity”に溢れたものとすべく、若者・女性・文化路線、NGO/NPO シリーズなどに取組みました。独立・国交50周年シリーズ、感想の寄稿者へのフィードバックと『読者のひろば』なども試みました。また2019年に寄稿者が入会できるシステムを創設しました。新規の個人会員のほとんどがメルマガ寄稿者です。そして2021年には編集委員会を設置し、編集の組織化の道を歩んでいます。

無我夢中の4年間であり、至らなかつたことも少なくないと冷や汗をかいています。幸いにも2014年の創刊以来欠号なく、この7月で117号を迎えることが出来ました。これも理事・会員の皆様のご支援ご協力の賜物と感謝しています。

8月号より丹羽京子東京外国語大学大学院前教授が編集長を務めます。丹羽新編集長は、皆様ご高承のとおり、ベンガルの言語・文学の第一人者です。またメルマガ編集委員でしたので勤所を抑えています。理想的なメルマガ編集長です。私も引き続き編集委員を務めます。編集長はメルマガの編集に責任を負いますが、その中身は、皆様のご寄稿ですので、引き続きご寄稿はじめご支援ご協力の程、お願いします。

最後に感想を一言。

男と生まれたからには、一度はやってみたいことがある。連合艦隊司令長官、プロ野球監督、オーケストラ指揮者である。メルマガ編集長は、4～5ヶ月前から毎月4～5本の寄稿の仕込みにかかり、配信後のフォローアップまで、常時約30名を相手にメールでコンタクトを取り続ける。男性とは見えない糸で、女性とは赤い糸(?)で結ばれているかのよう。糸を引いて激励し、糸をゆるめてなごませ、糸を揺らして心を変えさせる。あたかも室内オーケストラの指揮者である。

約30名の心をあやつり、あやつられながら、駆け引きをくり広げる。心を通わせて一緒に佳きストーリーを紡ぎ出し、全体をハーモニー豊かにまとめ上げていく。これこそメルマガ編集長の歓びであり醍醐味!

男と生まれたからには一度はやってみたい指揮者。その疑似体験の夢がかなった、無我夢中の4年間だった。

太田清和

=====

一般社団法人 日本バングラデシュ協会

<http://www.japan-bangladesh.org/>